

## 一葉恋慕 (一)

多谷昇太

(一) まとの蛩

数メートル先のベンチに誰か居る。弱視であるにも拘らず眼鏡を掛けることが嫌いな私には都会の中とは言え、夜陰に沈む、木々の生茂った公園内であつてはそれが誰なのかよく判らない。此処をめぐらとしている路上生活者だろうか。境遇的にさしてそれと変わりなく、世間の差別の目から逃れて、暫し安息の時を過そうと思つていた私にはその存在が迷惑だった。相互互いと思われようが、世に疎んじられ、氣の荒んだ者同等にあつては却つて互いに敬遠し合う場合が多いのだ。少なくとも今の私はそうだ。相手の情けない姿に我が身を見てしまうのである。下手に絡まれない内にさつさとベンチの前を通り過ぎて、更に公園の奥に行こうとした私はしかし足を止めた。ベンチに腰掛けて、俯いたまま地面を見詰めているその人物の異様な姿と、何某か尋常ではない一種悲愴な雰囲気、氣を飲まれたからである。まず、明らかに路上生活者ではない。男ではなく女である。それも大層うら若い。また至つて質素なのだが今時あり得ない日本髪のと、

くすんだ格子縞の着物に小豆色の羽織姿が何とも奇妙だ。膝の上に風呂敷包みを置いているのもどこかおかしい。今時風呂敷など使うものだろうか？よからぬ了見からでなく、しかししきりに頭の中で詮索し続ける私の視線にとつと氣付いたのか、女が頭を上げて私を見た。それまでまったく心此処にあらずとばかりなにごとかに打ち悩んでいた女の表情は一転して驚愕をあらわしていた。いきなり出現した、男、の私に胆を冷やしたのだろう。

「何者：いや、何か御用ですか？立ち止まって女を見詰めるとは無礼ではありませんか。私をその手の女と間違われては困ります！」

女の口調は突つ慥貪で敵意さえ感じられたがしかしそれは私という不審者の出現の故とはあながち思えなかつた。何かしら思い詰めた良家の子女、もしくは切事に悩む乙女の深刻さがある。敵意は恐らく別の何者かに向けられていたのだろうが、しかしそのさ中にたまたま現れた私が標的となつたわけだ。もつともこの状況での若い娘なら敵意ならずとも警戒するのが当たりまえだ。マンションや会社のビル群が隣接するとはいへ、それらを隔てるように車両の多い道路が周囲を巡つているこの公園は、謂わば幹線道路中の大

きな中央分離帯のようで、時刻もあらうが散策する人も殆どいなかった。街灯も少なく、ただでさえ他人事に無関心が横溢するメガロポリス東京でこの状況は……。しかし、不審漢が私なので彼女は安心だ。女を襲うどころかその女子供に罵られてさえ応酬もできないほど気力のなえた私は100%無害である。ちなみに私は55歳で車上生活者だ。これだけでプロフィールは充分だろう？格差社会日本にあつては規格外の不良品、市民の嘲笑の的、しみ、的である。生活用品を満載した軽のワンボックスをこの近くに路駐している。車にもどるなら一日二四時間、一年三六五日、人々の蔑視に晒され続けるプライバシーゼロの苦痛から暫し逃れ、憩いたかったわけである。しかしそれゆえの女との邂逅だった。

女の物言いとまた多少時代がかったそれにも気圧されて黙っていると、怪漢とばかりに女はベンチから立ち上がつてそのまま行こうとした。しかし何かに思い当たつたかのようにその場に立ち止まり今度は一転へつらうがごとく次のようなことを私に尋ねて来た。ただし相当混乱してる観がある。

「あつ……失敬。もしやあなたは久佐賀さんではありませんか？先程の借り入れのこと、お考え直しのうえ

私を追いかけて？ふふふ、あの、私至つて弱視なもので、あなたが誰だかよく……もしや三組町、顕真術会の久坂佐賀先生ではありませんか？」何のことだかさっぱりわからなかった、私は始めて彼女に口を利いた。

「いや、違います。ただの通りすがりの者で……とぼつそと愛想なく云う。人とかかわろうとする意志がそもそもまったくないのだ。しかしそれならなぜ凝視を？と女は改めて機嫌を損じ且つとんだ私事の露呈や媚びまで売つてしまつてとその度を増すようだった。「ふん」とばかり鼻を鳴らして行きかけたがまた立ち止まる。今度は何だろうか。啖呵を浴びせられるのなら勘弁して欲しい。堪えられそうもないからだ。そうと察して背を向ける私にしかし女は、あとから思えば当然だったが更に意外なことを訊いてきた。

「あの、もし……ただいまは失礼しました」と啖呵どころかまず謝つて見せ次に「あの、此処はいつたいどこでしょう？法真寺の境内に居たはずなのに……それについて今しがたまで昼過ぎでしたのに急に暗くなつて……ほほほ、あの、恐れ入りますが此処の所番地を教えてくださいませんか？それとただいまの時刻を」と悉皆わからぬことを聞いてくる。鬚姿と云い、覇氣のまつたくない私でもさすがに眼前の女には強

く興味を引かされた。いったい何者なのだろう？ととにかく事実を伝えてやる。

「はい、今は夜の八時過ぎで、ここは大森駅から遠からぬ公園の中です。逆に…その法真時とは何処の寺ですか？抑々あなたは何処にお住まいですか？」などと、うら若き女性に臆面もなく私は訊き返していた。

女っ気ゼロの灰色の人生の中で奇跡のような一時だったが、それが本当に奇跡と知れるのに幾許もかからなかった。女はこう答えたのだ。

「えっ!?大森駅!?!大森駅って…あ、いや、その…わ、わたしは、下谷の龍泉寺町に住む者で、法真寺とは本郷帝大前の、浄土真宗のお寺で…あの、桜の木の下に観音様の座します寺です。先程までその脇の庭石に腰掛けて、物思いにふけておりましたのに…ふと気が付くと夜になっていて、あなたが目の前に立っていたのです。これはいったい…私は天狗の神隠しにでも会っているのでしょうか。あなたが天狗とも見えませぬが。ほほほ」

上品な笑いで誤魔化してはいるが女の不安な様子が手に取るように判る。女の云うことがもし本当なら無理もあるまい。憐憫とも同情ともつかぬ思いで改めて女を見た時、一瞬、何か、が心の中で弾けたような気がした。

情動とも何とも云えぬものが胸の辺りから伝わって来て、それが私の記憶の中から今に的確なものを伝えて来たのだった。下谷？龍泉寺町？…閃くものがあつた。私は女の顔を確かめるべく身を近づけた。

誤解して女が怯むのに「いや、お顔を確かめようと思ひまして…もしや知り合いかと」と言いわけしつつかまわずにその顔にまじまじと眺め入った。果せるかなある著名人にそっくりで、そして私は以前からその人物に痛く心酔していたのだった。ただし、である。その人物とは断じて今に存在する人物ではない。しかし矢も楯もたまらず今度は私の方から珍妙なる質問を投げかけてみた。

「あの、変なことを聞くようですが…今は何年ですか？その、別に…ちよつと確かめたくて」という問い掛けに「ほほほ、私の気が触れていると…。よござんす。さよう、開化の暦で云えば一八九四年、元号で云えば慶応に続く明示二十七年の二月かと存じますが、違つておりましょうか。ほほほ」と淀みなく答えてみせる。こいつはおどろいた！今は二〇〇五年で、明治から数えて四帝目の平成の御世だ。一体何事が起きたのだろうか。最近では珍しくもないタイムワープ物の、SF映画のごとき事態が出来しているのだろうか。ま

まったくわかには信じられなかったが、しかし私はあえてこの奇跡の中に没入すべく、急ぎ自らをしつらえたのである。すなわち耐え難い車上生活の果てにとうとう私の頭が狂ってしまったのか、あるいは仮にこれが事実として、では何故、私ごとき悉皆取るに足らぬ者の前にかくもの著名人が現れたのか、などという疑問や付いて離れぬインフエリオリティの呪縛などすべて払い除けて、とにかく私は彼のひととの共有を選んだのだ。「そうですかあ…い、いや、そうです、そうです。確かに今は明治二十七年の二月です」とうなずいてみせ、次にいよいよ彼女の名前を呼んでこの奇跡を確かめ…いや、共有しようところろみる。「それで失礼ですが、あなたはその…樋口一葉さん…ではありませんか？文芸誌、都の花、に若松賤子さんや、えーっと、その…」記憶を手繰る私に彼女は「小金井喜美子さん、ほほほ」と助け船を出してくれ、なおかつ自らの一葉なりを認めたのである！まさに「これはこれは」だった。他のいかなる著名人が時代や空間をワープして私ごときに対面してくれようとも、私がこれほど感激し、入れ込むことはなかっただろう。若い頃より今に至るまで彼女の生き方と作品に共鳴すること甚だしかったからである。

特に斯く車上生活に追いやられてからは（私を寝かせない、仕事させない、生活を破綻させるといふ、ある悪意の特定集団のストーカー行為を受け続けて私はこうなった…）頓にその傾向が強まっていた。

もつともこの、一葉好き、はひとり私だけではあるまい？少なからぬ人々が彼女への親近感を抱いていよう？彼女ほど我々日本人に愛され続ける人も少ないのだし、蓋しそれが現五千円札になる事由なのだろうがもつともこれは蛇足である。

「ああ、そうでした」と感謝して続けて「何せあの文芸誌のお顔を覚えていたものですから、あなただとすぐにわかりました。始めまして。私はあなたの大ファンなんです。もつとも今は誰でも五千円札でああなたと知れるでしょうが…」と自分ばかりが合点して入れ込んで云う。「五千円札？そんな法外な額のお札などあるのですか？それにファ、ファンとは英語ですか？あの、わたくし、ものを書くわりには至って浅学で、ほほほ。都の花で私の小説を読んでくださった方ですか？拙作でございましたでしょう」と、私への親近感を示しながらもなお不審げな樋口一葉。人の形や醸す雰囲気などに至って鋭い観察眼を持つことは日記などで知っていたが、その本領を発揮する為かあるいは



なおの不審を解く為か、こう云つて私にベンチを勧めて来るのだつた。「おや、腰掛けていた庭石がいつの間にか長椅子に化けて……まあ、驚きましたが、いかがですか、立ち話もなんですからちよつと座つて話しませんか？先ほどの大森駅とは芝の先の、梅林で有名なあの大森駅のことですか？」うなずいて私が腰をおろすのに合わせてみずからもまた腰掛けながら、近視に特有な、眉をしかめるがごとき細目を使って、私を改めて観察しているようだった。彼女の目に私はどう写り且つ私をどう値踏みむのだろうか。

私は横ポケットの付いた作業ズボンに作業服姿、その上から安物の紺色の防寒着を着込んでゐる。現代人が見るなら一目でブルーワーカーと知れようが車上生活者とまで見抜くかどうかはわからない。文字通りお互いに、お見合い、をしながら会話は進められた。

「そう……です。新橋、品川と来て……川崎へ至る前の大森駅です」と明治の東海道線の駅順に心を致しながら私は答えた。ついでに「私はその先の横浜に下宿していました。そこでその……車夫をしていたのですが、事情があつて止め、宿も払つて、今は宿無しのおぶれ者です」と、聞かれもしないのに簡略な身の上まで述べてしまう。ここまで落ちぶれる前私はトラックの運

転手をしており、それなら彼女の時代では車夫に近かろうと思つたのだし、横浜でのアパート住居を彼女にわかりやすく下宿と伝えたのである。誰に対しても飾るのは嫌だつたし（もつとも飾りようもないが）まして相手が心酔する一葉ならなおさらだつた。すさんだ倒錯心理のなせるわざと云えなくもないが、しかし誰かよく信ずるものの前で虚飾に走るだろうか。むしろ有体にみずからをさらけ出し、理解を賜らんとするのではないだろうか。勝手に師匠とも同志ともたのんでいた一葉に斯くみずからをさらすのは、私にとつて至極当然なことだつた。しかし当の一葉にしてみれば初対面の自分の前であぶれ者などと臆面もなく云い、まして目をすがめてよく見れば、我父母に等しき年配者なる私をはたしてどう思うだろうか。第一私はまだ彼女の、拙作「うもれ木」への感想を述べていない。

年甲斐もない興奮の中にいるとはいへ非礼だし、何より本郷から大森へのワープに度肝を抜かしているだろう彼女の心の内をまったく慮っていなかった。

（以下次号）

## 「小説返歌」

いみじき世せちなる世とぞ何かせん世に迎へらる我ならなくに

人見れば厭はしく声聞かば憂し手負いの獣牙剥くごとし

風を聞く森の千葉（せんば）のそよげるを人の世みにくただ風を聞く

—右三首、著者

卯の花のうき世の中のうれたさにおのれ若葉のかけにこそすめ

とにかくも超えるを見ましうつそみの世わたる橋や夢の浮き橋

世の人はよも知らじかし世の人の知らぬ道をもたどる身なれば

—右三首、樋口一葉

